

Strix 13 : 221-223 (1994)

コサギ *Egretta garzetta* によるくちばしを疑似餌とした採食行動

坪島 遊

〒733 広島市西区南観音 6-9-22-101

コサギ *Egretta garzetta* は、普通、浅瀬で自らの足をふるわせて砂の中や小石の下にひそむ魚やカニ、エビなどを追いだすか、近くにいる魚をみつけてすばやく接近してとらえるといった方法で採食を行なう。だが、著者は1988年以来、毎年、コサギが自分のくちばしに魚をおびきよせて採食する行動を観察している。コサギが自分のくちばしを疑似餌として利用する例はこれまでに知られていないので報告する。

観察したのは広島県呉市を流れる二河川で、河口の近くにあるカモメ橋から約650m上流にある二河大橋までのあいだである。川幅は潮の干満によって変化するが、約100mである。

くちばしを疑似餌としたコサギの採食行動は、地上の捕食者に対しては安全と思われる川の中央の浅瀬で行なわれた。くちばしの先端を水面につけ、水面を振動させて波紋をつくり、その波紋に近づいてくる魚をくわえとるものである。その際には、あしを水深に応じて適度に曲げ、からだを低くし、首を少し縮めているが(図1、2)、首を縮める程度やくちばしと水面との角度は個体によって多少違っていた。からだの方向は晴れているときには太陽に向いており、太陽を背にすることはなかった。

くちばしで水面を振動させる場所は1か所の場合と、弧を描くように左右に移動させることがあった。1回に波紋をつくり続ける時間は、10~30秒であるが、3分以上続けていたこともあった。そのあいだに魚がつかまらないか失敗するかすると、数歩移動して場所をかえ、再びこの行動をはじめた。こうした行動を2時間以上続けていたことがあった。ただし、人やイヌの近づける水際で行なうことはなかった。

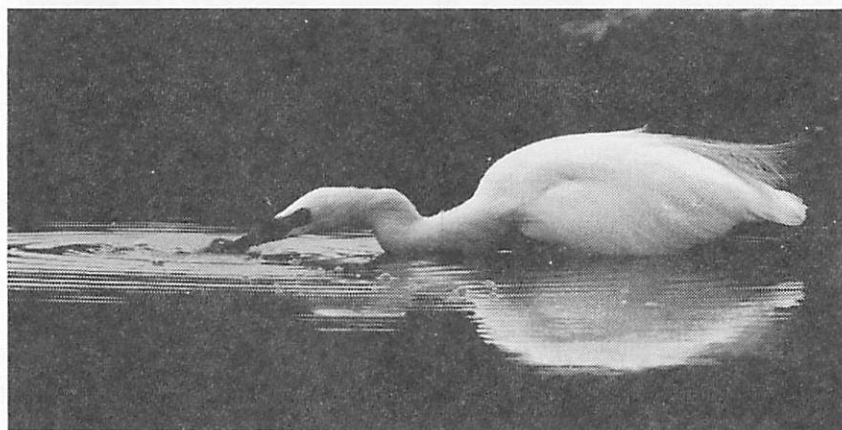


図1. くちばしを疑似餌として採食しようとしているコサギ.

1994年12月24日受理

キーワード：疑似餌漁、コサギ、広島

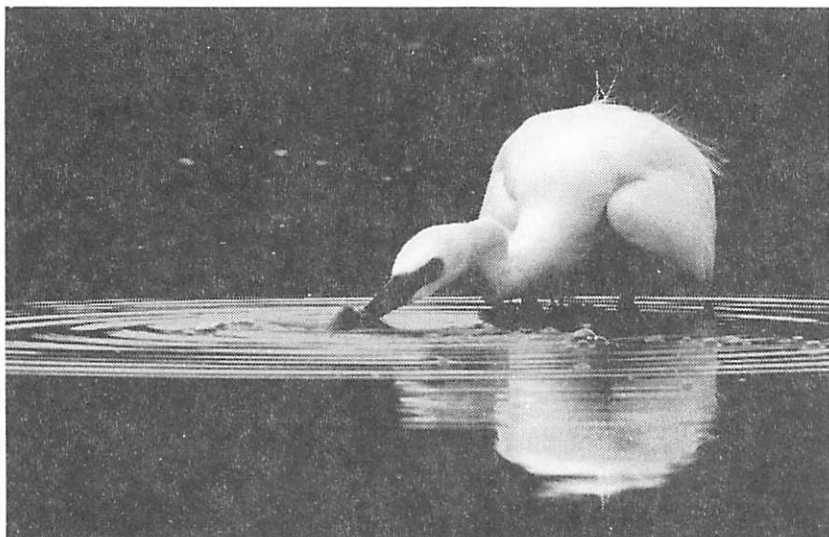


図2. くちばしを疑似餌として採食しようとしているコサギ.

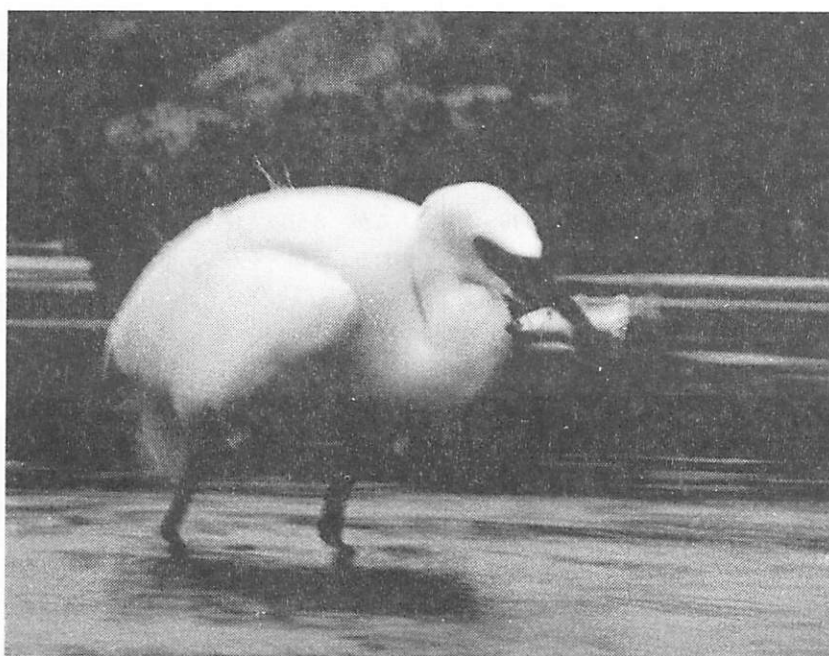


図3. ボラを捕食したコサギ.

魚がよってくると、首を縮めてくちばしを水面からあげ、その反動を利用してくちばしをつっこみ、魚を捕獲した(図3)。1994年5月5, 7, 8, 21, 22日, 6月5日にこの行動をビデオに撮影し、それを分析した結果、合計1時間15分のあいだに6匹の魚を捕獲した。

この行動が観察される時期は4月下旬から10月下旬に限られるが、1994年には5月5日まで観察されることはなく、7, 8月に観察されることはなかった。観察される時間は、干潮から満潮になる海水が川に流れ込んでくる時間帯であった。春になるとこの時間帯には、ボラ *Mugil cepalus* の稚魚が川にあがってくるので、それらをねらったものと思われる。

調査地には、コサギが10～20羽生息しており、下流で採食するものともう少し上流で採食するものの2つがあると思われる。この行動が観察されたのは、後者のグループだけであった。ただし、後者のグループのすべての個体がこの行動をしているのではない。1994年5月21日に約1時間30分、連続して観察を行なった際には、決まった個体のみがこの行動を行っていた。1989年と1994年にこの行動を行っていた個体は2羽、1990年と1991年には3羽、1992年には4羽が同時にこの行動を行っていた。

ほかの地域で観察例がなく、しかも1つのグループの中の2～4羽のコサギしか、くちばしを疑似餌としてつかう採食法を行わないことから、コサギはこの行動をなんらかの方法で学習したと考えられる。

この行動を学習したきっかけとしては以下のことが考えられる。

昆虫が水面に落下し、もがいて波紋をつくり、それを魚が食べるのをみたことがあげられる。この行動が観察された調査地の上流側は沿岸に昆虫の多く発生する草地がある。反対にこの行動が観察されなかった下流側にはこのような草地がない。したがって、上流側の方が学習する機会は多いと思われる。

また、足をけがしたコサギが浅瀬でじっと動かず、近くによってきた魚を捕食しようとしていたのを別の機会に2度観察した。通常の方法で魚を捕食できなくなったこのようなコサギが、たまたま近くによってくる魚を捕食するだけでなく、偶然水面につけたくちばしに魚がよってくるのか、水面に落下した昆虫に魚がよってくることを知り、くちばしを疑似餌とした採食方法を学習し、体を低くして魚に目立ちにくい姿勢や、よってきた魚をすばやくくわえとる行動といった一連の動作を発達させたことも考えられる。

波紋に本当に魚がよってくるかどうかは、満潮へむかう時間帯に、つりざおの先を水面につけて波紋をつくる実験によって確かめた。10分ほどのあいだに15cmほどの魚が1匹、20cmほどの魚が1匹、5cmほどの魚の群れが接近してきた。今回行なった実験はこれだけだが、今後は、この行動が行なわれない季節や時間帯に行なってみたいと思っている。

1994年6月26日、7月3、17、24日にはこの行動はまったくみられなかった。川にはたくさんのボラがのぼっており、コサギはその群れを追いかけて2～3分に1回の割合で捕獲していた。また、冬期には観察されないことから、魚の多い時期や非常に少ない時期にはくちばしを疑似餌とした採食方法はあまり効率的ではないのかもしれない。

Little Egrets using their own beaks as baits to lure fish

Yu Tsuboshima

6-9-22-101 Minamikannon, Nishi-ku, Hiroshima-shi, Hiroshima 733

I observed Little Egrets *Egretta garzetta* luring fish to their own beaks and then catching them, in the Niko River, Kure City, Hiroshima Prefecture. The method was a continuous opening and shutting of their beaks in order to make water rings.

Key words: beaks, *Egretta garzetta*, lure fishing, Hiroshima